様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　５月２４日現在

機関番号：10101
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2008～2010
課題番号：20520562
研究課題名（和文）　徳川儒学思想における明清交替――政治と学問の〈正統性〉評価の変遷

研究課題名（英文）　The Min-Qing Transition in Tokugawa Intellectual History: Problems of Legitimacy in Politics and Academia.

研究代表者
眞壁　仁（MAKABE JIN）
北海道大学・大学院法学研究科・准教授
研究者番号：30311898

研究成果の概要（和文）：本研究では、中国での「華夷変態」を、短絡的に日本でのナショナリズム運動と国学運動の勃興に結びつけるのではなく、徳川中期・後期の儒学者たちの正統性認識の変容として検討した。本研究により、限られた江戸の儒学者を通してだが、明清交替期を経て清朝の各時代の学術が徳川日本に移入するに際して、時代の局面ごとにどのような形で受容され、いかなる反応を生んだのかについて見取り図を描くことができた。徳川儒学の独自な問題意識と展開のもと、幕府儒者の周辺においても清朝学術の批判的摂取が行われていたことが判明した。

研究成果の概要（英文）: This research analyzed Chinese dynastic legitimacy in the eighteenth- and the first half of nineteenth-century Japanese Confucian Thought, examining the political backdrop and intellectual transformations that took place during the late Ming and early Qing periods. Owing to the influence of scholars and others from the Ming who had defected to Japan, the Tokugawa government was at first hesitant to recognize the legitimacy of Qing dynasty. Following the government's eventual recognition of Qing rule, the evaluation of the legitimacy of Qing as opposed to Ming scholarship drastically changed in the intellectual world as well. As it is well known, the rise of National Learning in Western Japanese intellectuals was one response for the transition. This study examined the Eastern Tokugawa governmental Confucians' case and shows the outline of transition and evaluation of scholarly legitimacy in each stage in the history of imported Qing's books.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２００９年度	1,200,000	360,000	1,560,000
２０１０年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・日本史
キーワード：明清交替、徳川思想史、儒学、正統性

１．研究開始当初の背景

（1）歴史学研究の分野では、「鎖国」概念の見直しが唱えられて久しい。海禁政策の最中でも、長崎に来航した唐船を介して毎年かなりの数の漢籍が輸入され、幕府や諸藩の文庫にも蒐蔵されていたことが明らかになっている。しかし、日本思想史研究の分野では、近世儒学の学説展開史と学統派別の整理の影響はなお拭い難く、また政治思想史研究で

も、近世日本の儒学の特徴は「鎖国体制」下の「世界史的に見てもきわめてユニークな文化的な諸条件の下」で、「一国史」内だけで独特な思想的展開を遂げる、との解釈が支配的であるように思われる。近年の東アジアの比較思想の観点を入れた研究においても、思想受容の歴史的接点への関心は薄く、明清交替による思想上の位相変化については、ほとんど言及されていない。従来の思想史研究が活字資料文献に依拠しその再解釈に集中していたために、史料探索と書誌研究の蓄積の上になされる実証的な歴史研究の進展を消化し切れていない。

（2）このような思想史研究の現状のもとでは、近年までの歴史学研究の成果、とりわけ書籍輸入による文化受容の問題を徳川日本の思想史研究に採り入れることが求められている。江戸時代の唐船舶載書籍を研究した大庭脩や東アジア史の関心から近世日本での明清研究を位置づけようとした川勝守らの成果と問題関心を引き継ぎ、その上で思想史研究を進めることは、学問進展の上で不可欠であるように思われる。

（3）研究代表者はこれまで、日本政治思想史の分野より、東アジア儒学思想との連関で広義の幕府知識人の思想を取り上げ、「徳川時代の学問と政治」の関係を再構成する研究を重ねてきた。とりわけ寛政期以降の林家と昌平坂学問所儒者たちについて、昌平坂学問所蔵書や学問所儒者の個人蔵書群、各地の藩校蔵書群などの書誌的調査を踏まえた実証的な検討を行い、徳川時代後期の思想史研究に独自な寄与を試みた。蔵書群調査に基づくこの研究により明らかになったことは、近世日本の儒学思想を、「鎖国」時代の「一国思想史の展開」としてではなく、東アジア儒学の思想展開とそれとの関わりのなかで同時代史的に把握しなければならないということである。漢籍移入によって、幕府知識人たちは、同時代の東アジアの学術や外交情報という文化・情報の受容の点で、徳川日本の最前線に位置していたからである。

２．研究の目的

（1）本研究は、徳川日本の思想において特に中国の王朝交替、すなわち明清交替（1644年）が有した意義を思想史的に再検討する。徳川幕府と政権の中枢に近い知識人たちが新王朝の政権に政治的正統性を承認する経緯と、清朝の学問に学問的な正統性を認めるようになる過程は、いかなるかたちで関連しているのか。この課題に応えるために、明末・清初の中国の知的状況や東アジアの周辺諸国の対応を視野におさめつつ、徳川幕府の幕府儒者たちの思想を分析しようとする。

（2）漢民族の明が北方女真族によって滅ぼされ、清へと王朝が交替する一連の事件は、東アジアの周辺諸国の対外政策と思想文化に多大な影響を与えた。たしかに明の遺臣（朱舜水や隠元ら）が近世初期の日本思想にもたらした思想的影響は知られている。亡命した明の遺臣たちの影響もあり、徳川政権が清王朝の〈正統性〉を承認するには年月を要するが、知識人の世界でも前後して明・清学術の〈正統性〉をめぐる評価が転換したと推測される。たとえば、荻生徂徠は 16 世紀後半明代の李攀竜・王世貞らが唱えた「古文辞」に触発されて「古文辞学」を唱導し始め、晩年まで「明律」研究に尽力していたが、その一方で、当時徳川政権の幕閣中枢では清朝への〈正統性〉承認が定まり、『大清会典』『定例成案』をはじめとする清朝学術の受容が始まっていた。同時代の学問評価における徂徠学の位置づけはもちろん、徂徠没後の儒学展開も、このような〈正統性〉転位の視点なしには評価できないと思われる。

（3）中国の王朝交替を契機に、朝鮮や日本においては「小中華」意識が生じるとされるが、本研究では、この「華夷変態」を短絡的に日本でのナショナリズム運動と国学研究の勃興に結びつけるのではなく、中国古典の経書解釈に従事し、漢詩文で自己表現する徳川中期・後期の儒学者たちの正統性認識の変容として検討する。そのため、在野の儒学者ではなく、当時情報移入の最先端に位置する幕府政権により近い知識人たちの思想変遷によって、徳川思想における明清交替を位置づける。

３．研究の方法

（1）本研究の方法的な特色は、自筆稿を含む未刊行の一次史料の発掘と、史料から浮び上がる彼らの経験とその思想の検討・評価にある。従来の思想史研究は、明治期以降の刊行文献や徳川時代の板本を一次史料として用いてきたが、その史料的限界ゆえに徳川儒学にとっての明清交替の問題を評価できなかった。

（2）日本の儒学者ばかりでなく、東アジア域圏で明清交替が如何に評価されたのか、日本国外の史料所蔵機関を利用して明末・清初の中国の諸史料や朝鮮儒者の著作を参照しつつ比較研究を行う。視野を広げることにより、一国史研究にとどまらず、東アジア思想史のなかで思想解読を行い、それらを徳川儒学の思想史上に位置づける。

４．研究成果

（1）計画申請時の見通しとその検証：

当初研究視角とした政治的正統性と学問的な正統性の評価は、たしかに次元の異なる問題である。歴史的にみてもこの両者の位相が重なり連関することは非常に稀であり、一般論として議論することは難しい。その評価変遷は前者から後者に関連しながら進むと予想されたが、転換期以降の推移を踏まえると、この要素のみで思想展開を説明することは難しい。一方の承認が他方の承認に繋がらない事例も少なくない。

ただし、歴史展開の動態的把握としては、時期ごとに両者が錯綜しつつ、その評価を変遷していくと捉えることは可能であると思われる。徳川幕府と政権の中枢に近い知識人たちが新王朝の清政権に一定の政治的正統性を認める経緯と、清朝の諸学問に学問的な正統性を認め、それらを受容する過程においても、決して単純な一方から他方への評価転換ではない形で、この連関の推移の軌跡を追うことができる。

（2）比較研究による方法と視角上の成果：

研究代表者は、明・清関係史料と関連研究書の収蔵において世界的に充実したハーヴァード燕京研究所で本研究に着手した。日本国内以外にも人的な研究ネットワークを拡げ、国内外の各種の研究会や国際学会をとおして日常的に、中国・台湾・香港・韓国・ベトナム、また英語文化圏の研究者たちと研究方法と視角について意見交換を行った。

本研究にとって有意義な比較となったのは、16 世紀後半における朝鮮での前後七子の文学論受容とそこからの離反の問題、および徂徠や宣長を含め、明・清期に李氏朝鮮・徳川日本などの東アジアの思想が哲学から文献学研究へと大きく質的な転回を遂げることに注視する欧米圏研究者たちの比較研究との交流であった。

その結果、日本の既存の学問枠組みを越えた研究上の示唆を受けて、とくに以下の三点に課題を絞ることにした。

①学問と文芸との接触という徳川中期以降の文学史の特色に注目すること。清朝学術の受容基盤となったのが、経典解釈などの儒学の哲学的側面のみならず、詩論・文学論であったことを踏まえて、順治・康熙年刊の書籍蒐集と文芸結社の活動を関連づける必要が生じた。

②学術コミュニティの社会的環境とその偏差の側面に着目すること。地域と知的ネットワークに力点を置く社会史研究は、その拠点ごとの思想比較へと導く。とくに乾隆期学術が本格的に受容された化政期において、舶載書本所蔵の諸文庫への接近度合いが清朝考拠学の受容とその評価にどのように反映しているのかという課題を得た。

さらに③儒学者による同時代の清朝中国評価として、移入された清朝の資料に基づいて行われるようになる清朝中国の評価が、日本での清学術理解の深化に伴いどのように変化するかを、幕末に至までの清朝経世論の選択的摂取に即して明らかにすることである。その際、比較思想研究の反省から、文化圏ごとの思想比較と思想類型の対照に終わらせないために、接点となる作品の受容とその理解に着目する。検討作品については、当時の諸文庫における蔵書収蔵状況、和刻本出版、「書後」など清代の作品についての徳川日本の儒者の反響とその内容をそれぞれ検討して絞り込んだ。

（3）新たな知見にもとづく成果：

清朝の統治と学問の正統性評価は時代ごとに変化していくが、徳川儒学思想史において、それは史的推移にしたがい、次のように順次区分して概括できる。

①政治的正統性評価
（康熙帝・雍正帝の治世）
②学問的正統性の転位
（康熙・雍正・乾隆期の学術移入）
③同時代的な乾隆期学術の本格受容
（批判的摂取による「折衷」）
④史料に基づく清朝中国評価へ
⑤アヘン戦争以降の経世論移入

すなわち、①唐船風説書での康熙帝の治世への評価から、徳川吉宗のもとで清朝の政治に一定の正統性を認めるようになる。

②それに伴い清初から康熙年間までの漢籍が移入して大きな反響をよび、清初の学問への正統性の承認が、詩文論でも経書解釈でも、古文辞学や徂徠学批判の理論的背景となっていく。具体的には、順治・康熙年間の学問移入に伴い、袁宏道「清新性霊」説や銭謙益『列朝詩集』（順治年刊）などが参照されることによって、古文辞学の主唱者であり『唐詩選』の選者である李攀龍批判がなされ（山本北山『作詩志彀』）、盛唐詩を高く評価する荻生徂徠・服部南郭の詩文論からの離反が始まり、脱古文辞・反古文辞と宋詩・宋学鼓吹が起こる。経書解釈においても、陸隴其などが引照された清初の宋学の正統性が承認され、いわゆる寛政異学の禁がもたらされる。

③文化・文政年間になり、より同時代的な乾隆期の清朝考証学の成果が受容されると、さらに新たな段階を迎える。詩文論においては、江戸の山本北山・市河寛齋・菊池五山らによって、明代半ばの古文辞ではなく清代の袁枚（性霊派）への評価が高まり、その影響下で大窪詩仏は趙翼（性霊派）に依拠しつつ詩文論を展開する。都下の宋詩鼓吹の風潮に

対しては、古賀侗庵「古処堂詩文会」では、その批判も現れるようになる。また、経書解釈や、顧炎武『日知録』、紀昀『四庫全書総目提要』、趙翼『廿二史劄記』の読解を通しても窺えるところでは、程朱学を基調とする儒者のなかでも解釈の方法的態度の選択が求められている。

明代半ばからの校勘学に影響は、徂徠門人たちの古文献調査と校勘作業にもみられ、それは林述齋編『佚存叢書』や市河寛斎『全唐詩逸』などにも繋がっていた。しかし、この時期の移入する乾隆期の文物に共有された特徴は、その個別考証の洗練させたものであった。それ以前の校勘学が、古文献の後世の偽作や文献上の不完全さを取り除くという文献実証に関心を集中させるのに対し、この時期に顕著な経史解釈・考拠（文献批判研究）の方法は、根拠となる事実を示して、ひとつの結論へと深めていく点にあると思われる。「清朝考証学」の二大要素である 「古音学」（音韻学）と「文献批判研究」のうち、前者を当時の日本人はどれほど理解できたのかという問題は残り、徳川日本では、今日体系化して知られる「清朝考証学」と異なる清朝学問の思想地図が描かれていたはずである。

本研究での取り上げた対象に即して検討した結果、明学の弊害を意識した「考証学」受容、学問成果をうけた「折衷」の積極的評価、清朝考拠学の批判的受容（顧炎武『日知録』、紀昀『四庫全書総目提要』、趙翼『廿二史劄記』）がみられた。そして、異なる知的コミュニティの比較を通して明らかになるのは、経史解釈史の蓄積と唐船舶載本所蔵の諸文庫の存在こそが、この「博渉」考拠の学問を可能にしていたことである。

④他方、この時期には清初について記された歴史書などが移入し、それはかえって清初に行われた清政府の残虐な行為を印象づけている。唐船による舶載書籍の移入が増すにつれ、漢詩文学と経史学における清朝の学問評価と、軍事によって立つ清朝政府の正統性評価の関係は、一層、複雑なものとならざるを得なかった。雍正帝『大義覚迷録』、乾隆帝『日知薈説』の読解を通して皇帝個人の資質を問うばかりでなく、『清三朝実録』、『東華録』や趙翼『武功紀盛』・『八家集』・王秀楚『揚州十日記』などの明清交替の基本文献が和刻本として翻刻され、そこでは史料に基づく批判がなされていた。鄭成功をめぐる史料校勘（『臺灣鄭氏紀事』）も、その一環として捉えられる。

⑤アヘン戦争以後は清朝の政治的、学問的権威は大きく揺らぎ、魏源『聖武記』『海国図志』や『皇朝経世文編』の日本での受容から明らかなように、清朝の経世論の読解においても、専ら選択的・実利的な側面での受容になっていった。顧炎武・魏禧・陸隴其・袁枚・趙翼の経世論への評価という、この経世論の選択的な読解からは、徳川儒学において独自な問題意識と展開が積み重ねられ、その先行する経験のもとで、思想受容が行われているということである。ここから導かれる一つの見地は、徳川中期・後期において、儒学者たちの眼前に広がっていた知的世界は、今日体系化された中国哲学史とそのもとでの「清朝考証学」とは、かなり趣を異にするものであったという認識である。従来、徳川儒学思想史は、中国哲学史とその展開を基準として整理されてきたが、その捉え方には再考が求められるのではないだろうか。

（4）国内外における本研究の位置づけ：

江戸の儒学という限定をつけた限られた対象をとおしての検証だが、本研究の成果は、①一国内にはとどまらない、複数の国の政治的正統性と学問的な正統性の転位とその関連、その展開の動態的把握を行うという点で新たな試みとなり、またこれをとおして②唐船による書籍移入（中国における「文字の獄」・禁書）と日本での購入・閲覧（幕府・学問所・文庫）という二重の制約を経た上での、徳川儒学における学問の“選択的”摂取という問題を浮き彫りにすることができた。

（5）今後の展望と課題：

ただし、限られた期間で厖大な史料群を調査し分析することには限界があり、今後に残された課題も少なくない。本研究の成果から展開できるより対象を拡げた検討としては、①昌平坂学問所儒者とその周辺の陽明学派の明清学統認識および海外認識との対比、②朝鮮の「北学派」との比較、さらに③徳川日本における、いわゆる「清朝考証学」（乾嘉之学）受容史、④清朝の学術における、漢詩文（性霊派）と経学（考証学）の共有された美意識や感性の問題の検討などが考えられる。今後予定されている国際シンポジウムや国際学会では、日本語以外で本研究成果を問うと同時に、同時代の東アジア思潮との比較に議論を発展させたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 11 件）

① 眞壁仁 「「Ｌ正統」と「Ｏ正統」は交叉したのか――「文字の獄」と「異学の禁」の思想統制」、北大政治研究会、2011 年 1 月 20 日、北海道大学

② 眞壁仁 「徳川儒学思想における明清鼎革――徂徠学以降の評価を中心に」、宗教遺産科研プロジェクト第 1 回研究会、

2010 年 10 月 11 日、京都府立大学

③ 眞壁仁「徳川思想史における明清交替」、日本政治学会、2010 年 10 月 10 日、中京大学

④ 眞壁仁、「正統性・仁政・明君：儒者たちの藩政と外政への参与」、歴史学研究会近世史部会例会、2010 年 2 月 28 日、東京大学

⑤ MAKABE, Jin, “Agrarian Emigration and Christian Mission: A disciplinary history of Colonial Policies at Japanese Imperial Universities,” The 43rd Annual Conference of ASPAC (Asian Studies on the Pacific Coast), 2009.6.21, Soka University of America, Aliso Viejo, CA, USA

⑥ MAKABE, Jin, “Colonial Policies at Japanese Imperial Universities: Between the Christian Mission and the Social Science,” the 12th Harvard-Yenching East Asian Salon, 2009.2.17, Harvard-Yenching Institute, Cambridge, MA, USA

⑦ MAKABE, Jin, “A Genealogy of Japanese Colonial Policies: The Views of Christian University Scholars,” Asian Studies Lecture, 2008.12.5, David M. Kennedy Center for International Studies, Brigham Young University, Provo, UT, USA

⑧ 眞壁仁、「内村鑑三と第一次世界大戦」、内村鑑三研究会、2008 年 11 月 24 日、慶應義塾大学

⑨ 眞壁仁、「徳川後期の学問と政治」、2008 年 11 月 3 日、財団法人徳川記念財団、霞会館（東京都千代田区）

⑩ MAKABE, Jin, “Colonial Policies of Christian Scholars at the Imperial Universities of Japan: Frontier spirits from New England to East Asia via Sapporo,” New England Conference of the Association for Asian Studies, 2008.10.18, University of Massachusetts Boston, Boston, MA, USA.

⑪ MAKABE, Jin, “Colonial Policies of Christian Scholars at Sapporo Agricultural College: Mid-level Farmers, Emigration, and “Co-prosperity”,” New York Conference of the Association for Asian Studies, 2008.9.26, Hamilton College, Clinton, NY, USA.

〔図書〕（計 1 件）

① 眞壁仁、「矢内原忠雄の植民政策論と絶対平和論」千葉眞編『平和の政治思想史（おうふう政治ライブラリー）』おうふう、149-183 頁、2009 年 8 月

６．研究組織

(1)研究代表者
眞壁　仁（MAKABE JIN）
北海道大学・大学院法学研究科・准教授
研究者番号：30311898

(2)研究分担者　なし

(3)連携研究者　なし